



文字禍

中島敦



青空文庫





文字の靈れいなどというものが、一体、あるものか、どうか。

アッシリヤ人は無数の精靈を知っている。夜、闇の中を跳梁ちようりょうするリル、その雌めすのリリツ、疫病えきびょうをふり撒くナムタル、死者の靈エティンム、誘拐ゆうかい者ラパス等、数知れぬ悪靈あくりょう共がアッシリヤの空に充ち満ちている。しかし、文字の精靈については、まだ誰だれも聞いたことがない。

その頃ころ——というのは、アシウル・バニ・アパル大王の治世第二十年目の頃だが——ニネヴェエの宮廷きやうていに妙な噂うわさがあった。毎夜、図書館の闇の中で、ひそひそと怪しい話わらわし声こゑがするという。王兄シヤマシユ・シユム・ウキンの謀叛むほんがバピロンの落城らくじやうでようやく鎮しずまつたばかりのこととして、何かまた、不逞ふていの徒との陰謀いんぼうではないかと探つてみたが、それらしい様子もない。どうしても何かの精靈どもの話わらわし声こゑに違ちがはない。最近に王の前で処刑しじやうされたバピロンからの俘囚ふじゆう共の死靈しじやうの声こゑだろうという者もあつたが、それが本當でないことは誰わかにも判る。千に余るバピロンの俘囚ふじゆうはことごとく舌しほを抜ぬいて殺され、その舌を集めたところ、小さな築山つちやまが出来たのは、誰知らぬ者のな

い事実である。舌の無い死靈に、しゃべれる訳がない。星占ほしうらなや羊肝ようかん卜ぼくで空しく探索たんさくした後、これはどうしても書物共あるいは文字共の話わらわし声こゑと考えるより外はなくなつた。ただ、文字の靈れい（というものが在るとして）とはいかなる性質をもつものか、それが皆目かゝい判らない。アシウル・バニ・アパル大王は巨眼縮髮きよかんしゆくはつの老博士ナブ・アヘ・エリバを召めして、この未知の精靈についての研究を命じたもつた。

その日以来、ナブ・アヘ・エリバ博士は、日ごと問題の図書館（それは、その後二百年にして地下に埋没まいぼつし、更に二千三百年にして偶然発掘ぐうぜんはつこくされる運命をもつものであるが）に通つて万巻の書に目をさらしつゝ研鑽けんざんに耽ふけつた。両河地方では埃及と違つて紙草かじそうを産うしない。人々は、粘土ねんどの板に硬筆こうひつをもつて複雑な楔形くさびがたの符号ふごうを彫りつけておつた。書物は瓦かわらであり、図書館は瀬戸物屋せとものやの倉庫くらぐらに似ていた。老博士の卓子あづき（その脚には、本物の獅子ししの足が、爪つめさえそのままに使われている）の上には、毎日、累々るゐりたる瓦の山がうずたかく積まれた。それら重量ある古知識の中から、彼かれは、文字の靈れいについての説みだを見出みだそうとし

たが、無駄であつた。文字はボルシツバなるナブウの神の司りたもう所とより外には何事も記されていないのである。文字に靈ありや無しやを、彼は自力で解決せねばならぬ。博士は書物を離れ、ただ一つの文字を前に、終日それと睨めつこをして過した。ト者は羊の肝臓を凝視することによつてすべての事象を直観する。彼もこれに倣つて凝視と静観とによつて真実を見出そうとしたのである。その中に、おかしな事が起つた。一つの文字を長く見詰めている中に、いつしかその文字が解体して、意味の無い一つ一つの線の交錯としか見えなくなつて来る。単なる線の集りが、なぜ、そういう音とそういう意味とを有つことが出来るのか、どうしても解らなくなつて来る。老儒ナブ・アへ・エリバは、生れて初めてこの不思議な事実を発見して、驚いた。今まで七十年の間当然と思つて看過していたことが、決して当然でも必然でもない。彼は眼から鱗の落ちた思がした。単なるバラバラの線に、一定の音と一定の意味とを有たせるものは、何か？ ここまで思い到つた時、老博士は躊躇なく、文字の靈の存在を認めた。魂によつて統べられない手・脚・頭・爪・

腹等が、人間ではないように、一つの靈がこれを統べるのでなくて、どうして単なる線の集合が、音と意味とを有つことが出来るようか。

この発見を手始めに、今まで知られなかつた文字の靈の性質が次第に少しずつ判つて来た。文字の精靈の数は、地上の事物の数ほど多い、文字の精は野鼠のように仔を産んで殖える。

ナブ・アへ・エリバはニネヴェの街中を歩き廻つて、最近に文字を覚えた人々をつかまえては、根気よく一々尋ねた。文字を知る以前に比べて、何か変つたようなところはなにかと。これによつて文字の靈の人間に対する作用を明らかにしようというのである。さて、こうしておかしな統計が出来上つた。それによれば、文字を覚えてから急に蝨を捕るのが下手になつた者、眼に埃が余計はいるようになった者、今まで良く見えた空の鷲の姿が見えなくなつた者、空の色が以前ほど碧くなくなつたという者などが、圧倒的に多い。「文字ノ精ガ人間ノ眼ヲ喰イアラスコト、猶、蛆虫ガ胡桃ノ固キ殻ヲ穿チテ、中ノ実ヲ巧ニ喰イツクスガ如シ」と、ナブ・アへ・エリバは、

新しい粘土の備忘録に誌した。文字を覚えて以来、咳が出始めたという者、くしゃみやみが出るようになって困るという者、しゃっくりが度々出るようになった者、下痢するようになった者なども、かなりの数に上る。「文字ノ精ハ人間ノ鼻・咽喉・腹等ヲモ犯スモノノ如シ」と、老博士はまた誌した。文字を覚えてから、にわかには頭髪の薄くなった者もいる。脚の弱くなった者、手足の震えるようになった者、顎がはずれ易くなった者もいる。しかし、ナブ・アへ・エリバは最後にこう書かねばならなかった。「文字ノ害タル、人間ノ頭腦ヲ犯シ、精神ヲ痲痺セシムルニ至ツテ、スナワチ極マル。」文字を覚える以前に比べて、職人は腕が鈍り、戦士は臆病になり、猟師は獅子を射擯うことが多くなった。これは統計の明らかに示す所である。文字に親しむようになってから、女を抱いても一向楽しゅうなくなつたという訴えもあつた。もつとも、こう言出したのは、七十歳を越した老人であるから、これは文字のせいではないかも知れぬ。ナブ・アへ・エリバはこう考えた。埃及人は、ある物の影を、その物の魂の一部と見做しているようだが、文字は、その影のよ

うなものではないのか。

獅子という字は、本物の獅子の影ではないのか。それで、獅子という字を覚えた猟師は、本物の獅子の代りに獅子の影を狙い、女という字を覚えた男は、本物の女の代りに女の影を抱くようになるのではないか。文字の無かつた昔、ピル・ナピシユチムの洪水以前には、欲びも智慧もみんな直接に人間の中にはいつて来た。今は、文字の薄被をかぶつた欲びの影と智慧の影としか、我々は知らない。近頃人々は物憶えが悪くなった。これも文字の精の悪戯である。人々は、もはや、書きとめておかなければ、何一つ憶えることが出来ない。着物を着るようになって、人間の皮膚が弱く醜くなった。乗物が発明されて、人間の脚が弱く醜くなった。文字が普及して、人々の頭は、もはや、働かなくなつたのである。

ナブ・アへ・エリバは、ある書物狂の老人を知っている。その老人は、博学なナブ・アへ・エリバよりも更に博学である。彼は、スメリヤ語やアラメヤ語ばかりでなく、紙草や羊皮紙に誌された埃及文字まですらすらと読む。およそ文字になつた古代のことで、彼の知らぬことは

ない。彼はツクルチ・ニニブ一世王の治世第何年目の何月何日の天候まで知っている。しかし、今日の天気は晴か曇か気が付かない。彼は、少女サビツがギルガメシュを慰めた言葉をも諳んじている。しかし、息子をなくした隣人を何と言つて慰めてよいか、知らない。彼は、アダッド・ニラリ王の後、サムラマツトがどんな衣装を好んだかも知っている。しかし、彼自身が今どんな衣服を着ているか、まるで気が付いていない。何と彼は文字と書物とを愛したであらう！ 読み、諳んじ、愛撫するだけではあきたらず、それを愛するの余りに、彼は、ギルガメシュ伝説の最古版の粘土板を嚙砕き、水に溶かして飲んでしまったことがある。文字の精は彼の眼を容赦なく喰ひ荒し、彼は、ひどい近眼である。余り眼を近づけて書物ばかり読んでいるので、彼の鷲形の鼻の先は、粘土板と擦れ合つて固い胼胝が出来ている。文字の精は、また、彼の脊骨をも蝕み、彼は、臍に顎のくつつきそくな僂僂である。しかし、彼は、恐らく自分が僂僂であることを知らないであらう。僂僂という字なら、彼は、五つの異つた国の字で書くことが出来るのだが。ナブ・ア

へ・エリバ博士は、この男を、文字の精霊の犠牲者の第一に数えた。ただ、こうした外観の惨めさにもかかわらず、この老人は、実に——全く不審といへば、不審だったが、幸福そうに見える。これが不審といへば、不審だったが、ナブ・アへ・エリバは、それも文字の霊の媚薬のごとき奸猾な魔力のせいと見做した。

たまたまアシウル・バニ・アパル大王が病に罹られた。侍医のアラッド・ナナは、この病軽からずと見て、大王のご衣裳を借り、自らこれをまとうて、アツシリヤ王に扮した。これによつて、死神エレシユキガルの眼を欺き、病を大王から己の身に転じようというのである。この古来の医家の常法に対して、青年の一部には、不信の眼を向ける者がある。これは明らかに不合理だ、エレシユキガル神ともあろうものが、あんな子供騙しの計に欺かれるはずがあるか、と、彼等は言う。碩学ナブ・アへ・エリバはこれを聞いて厭な顔をした。青年等のごとく、何事にも辻褄を合せたがることの中には、何かしらおかしい所がある。全身垢まみれの男が、一ヶ所だけ、例えば足の爪先だけ、無闇に美しく飾っているような、そういう

おかしな所が。彼等は、神秘の雲の中における人間の地位をわきまえぬのじや。老博士は浅薄な合理主義を一種の病と考へた。そして、その病をはやらせたものは、疑もなく、文字の精霊である。

ある日若い歴史家（あるいは宮廷の記録係）のイシュデイ・ナブが訪ねて来て老博士に言つた。歴史とは何ぞや？ と。老博士が呆れた顔をしているのを見て、若い歴史家は説明を加へた。先頃のバビロン王シャマシュ・シムム・ウキンの最期について色々な説がある。自ら火に投じたことだけは確かだが、最後の一月ほどの間、絶望の余り、言語に絶した淫蕩の生活を送つたというものもあれば、毎日ひたすら潔斎してシャマシュ神に祈り続けたいというものもある。第一の妃ただ一人と共に火に入つたという説もあれば、数百の婢妾を薪の火に投じてから自分も火に入つたという説もある。何しろ文字通り煙になつたこととて、どれが正しいのか一向見当がつかない。近々、大王はそれらの中の一つを選んで、自分にそれを記録するよう命じたもうであろう。これはほんの一例だが、歴史とはこれでもいいのであろうか。

賢明な老博士が賢明な沈黙を守つて見ているのを見て、若い歴史家は、次のような形に問を変へた。歴史とは、昔、在つた事柄をいうのであろうか？ それとも、粘土板の文字をいうのであろうか？

獅子狩と、獅子狩の浮彫とを混同しているような所がこの間の中にある。博士はそれを感じたが、はつきり口で言えないので、次のように答へた。歴史とは、昔在つた事柄で、かつ粘土板に誌されたものである。この二つは同じことではないか。

書洩らしは？ と歴史家が聞く。

書洩らし？ 冗談ではない、書かれなかつた事は、無かつた事じや。芽の出ぬ種子は、結局初めから無かつたのじやわい。歴史とはな、この粘土板のことじや。

若い歴史家は情なきような顔をして、指し示された互を見た。それはこの国最大の歴史家ナブ・シャリム・シユ又誌す所のサルゴン王ハルディア征討行の一枚である。話しながら博士の吐き棄てた柘榴の種子がその表面に汚らしくくつついている。

ポリシツパなる明智の神ナブウの召使いたもう文字の

精霊共の恐しい力を、イシユデイ・ナブよ、君はまだ知らぬとみえるな。文字の精共が、一度ある事柄を捉えて、これを己の姿で現すとなると、その事柄はもはや、不滅の生命を得るのじや。反対に、文字の精の力ある手に触れなかつたものは、いかなるものも、その存在を失わねばならぬ。太古以来のアヌ・エンリルの書に書上げられていない星は、なにゆえに存在せぬか？ それは、彼等がアヌ・エンリルの書に文字として載せられなかつたからじや。大マルズツク星（木星）が天界の牧羊者（オリオン）の境を犯せば神々の怒が降るのも、月輪の上部に蝕が現ればフモオル人が禍を蒙るのも、皆、古書に文字として誌されてあればこそじや。古代スメリヤ人が馬という獣を知らなんだのも、彼等の間に馬という字が無かつたからじや。この文字の精霊の力ほど恐ろしいものは無い。君やわしらが、文字を使って書きものをしとるなどと思つたら大間違ひ。わしらこそ彼等文字の精霊にこそ使われる下僕じや。しかし、また、彼等精霊の齋す害も随分ひどい。わしは今それについて研究中だが、君が今、歴史を誌した文字に疑を感じるようになったのも、

つまりは、君が文字に親しみ過ぎて、その霊の毒氣に中つたためであろう。

若い歴史家は妙な顔をして帰つて行つた。老博士はなおしばらく、文字の霊の害毒があつた青年をも害おうとしていることを悲しんだ。文字に親しみ過ぎてかえつて文字に疑を抱くことは、決して矛盾ではない。先日博士は生来の健啖に任せて羊の炙肉をほとんど一頭分も平らげたが、その後当分、生きた羊の顔を見るのも厭になつたことがある。

青年歴史家が帰つてからしばらくして、ふと、ナブ・アヘ・エリバは、薄くなつた縮れつ毛の頭を抑えて考え込んだ。今日は、どうやら、わしは、あの青年に向つて、文字の霊の威力を讚美しはせなんだか？ いまままいことだ、と彼は舌打をした。わしまでが文字の霊にたぶらかされておるわ。

実際、もう大分前から、文字の霊がある恐しい病を老博士の上に齎していたのである。それは彼が文字の霊の存在を確かめるために、一つの字を幾日もじつと睨み暮した時以来のことである。その時、今まで一定の意味と

音とを有つていたはずの字が、忽然と分解して、単なる直線どもの集りになつてしまつたことは前に言つた通りだが、それ以来、それと同じような現象が、文字以外のあらゆるものについても起るようになった。彼が一軒の家をじつと見ている中に、その家は、彼の眼と頭の中で、木材と石と煉瓦と漆喰との意味もない集合に化けてしまふ。これがどうして人間の住む所でなければならぬか、判らなくなる。人間の身体を見ても、その通り。みんな意味の無い奇怪な形をした部分部分に分析されてしまふ。どうして、こんな恰好をしたものが、人間として通つてゐるのか、まるで理解できなくなる。眼に見えるものばかりではない。人間の日常の営み、すべての習慣が、同じ奇体な分析病のために、全然今までの意味を失つてしまつた。もはや、人間生活のすべての根柢が疑わしいものに見える。ナブ・アへ・エリバ博士は気が違いそうになつて来た。文字の霊の研究をこれ以上続けては、しほいにその霊のために生命をとられてしまふぞと思つた。彼は怖くなつて、早々に研究報告を纏め上げ、これをアシユル・パニ・アパル大王に献じた。但し、中に、若干の

政治的意見を加えたことはもちろんである。武の国アツシリヤは、今や、見えざる文字の精霊のために、全く蝕まれてしまつた。しかも、これに気付いてゐる者はほとんど無い。今にして文字への盲目的崇拜を改めずんば、後に臍を噬むとも及ばぬであろう云々。

文字の霊が、この讒謗者をただで置く訳が無い。ナブ・アへ・エリバの報告は、いたく大王のご機嫌を損じた。ナブウ神の熱烈な讃仰者で当時第一流の文化人たる大王にしてみれば、これは当然のことである。老博士は即日謹慎を命ぜられた。大王の幼時からの師傅たるナブ・アへ・エリバでなかつたら、恐らく、生きながらの皮剥に処せられたであろう。思わぬこ不興に愕然とした博士は、直ちに、これが奸譎な文字の霊の復讐であることを悟つた。

しかし、まだこれだけではなかつた。数日後ニネヴェ・アルベラの地方を襲つた大地震の時、博士は、たまたま自家の書庫の中にいた。彼の家は古かつたので、壁が崩れ書架が倒れた。夥しい書籍が——数百枚の重い粘土板が、文字共の凄まじい呪の声と共にこの讒謗者の上に落

ちかかり、彼は無慙むざんにも庄死した。

(昭和十七年二月)

底本：「ちくま日本文学全集 中島敦」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年7月20日第1刷発行

底本の親本：「中島敦全集 第一巻」筑摩書房

1987（昭和62）年9月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号 5-86）を、大振りにつけています。

入力：野口英司

校正：野口英司、富田倫生

1997年11月17日公開

2004年2月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。

入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。